

NEWS RELEASE

AI 時代の大学教育と評価を考える

三重大学教員向け研修会を実施、講演資料・動画を公開

- 三重大学情報基盤センターの白井伸宙助教(学長補佐・AI 推進担当)は、2026 年 9 月に同大学人文学部が開催した教員向け研修会において、「AI 時代の大学教育と評価を考える」と題して講演しました。
- AI を使えばレポートなどの提出物を作れるため、持ち帰り型レポートだけでは課題の目的を果たしにくくなっています。研修会では、課題の目的に応じて、対面での筆記試験・口頭試問と、AI 利用を前提としたレポートとを使い分ける考え方を紹介しました。
- AI の利用を認めるかどうかは教育目標に応じて決め、学生本人に何が身に付いたかで評価する考え方を示しました。AI 利用を前提とした授業や課題には可能性がある一方、評価の一貫性と公平性をどう保つかが課題であることも指摘しました。
- 研修会の講演資料と動画を一般公開しています。

【概要】

2026 年 9 月に三重大学人文学部が開催した教員向け研修会で、同大学情報基盤センターの白井伸宙助教(学長補佐・AI 推進担当)が「AI 時代の大学教育と評価を考える」と題して講演しました。この講演で使用した資料と講演動画を一般公開しています。

生成 AI(以下、AI)が急速に普及し、学生が AI を使えることを前提に、授業・課題・評価方法をどう設計するかが、大学教育で新たに問われています。今回の研修会では、特に持ち帰り型レポートのあり方、教育目標に応じた AI 利用の考え方、学生本人の理解や能力の確かめ方、AI 時代の教員の役割などを取り上げました。



図 1 講演の結論(講演資料 p.3)



図 2 反転授業の実践例(講演資料 p.7)

出典:白井伸宙「AI 時代の大学教育と評価を考える」(2026 年 9 月 9 日、CC BY 4.0)

【背景】

AI を使うと、文章の作成、要約、翻訳、検索、アイデア出しなどを簡単に行えるようになりました。その結果、提出物の品質が高くて学生本人が理解しているとは限らず、提出物だけを見て学生本人の能力を判断することが難しくなる場合があります。

こうした変化を踏まえ、研修会では「学生本人の中に残っていてほしいものは何か」「AI などに外部化してよいものは何か」という問いを出発点として、課題と評価の設計を考えました。

【研修会で取り上げた主な内容】

1)課題の意味を学生に言葉で示す

教員には自明な課題の意味も、学生には伝わっていないことがあります。意味が伝わらなければ、課題は単なる「作業」になり、AI に任せることが学生にとって合理的な選択になります。そこで、「この課題は何のためか」「なぜ学生本人が取り組む必要があるのか」を明確にし、学生に言葉で示すことを提案しました。その上で、持ち帰り型レポートのままで目的を果たせるかを検討し、果たせない部分は授業内での執筆や口頭での確認などに移します。

2)AI に任せる部分と、本人が考える部分を分ける

AI の利用を認めるかどうかは、教育目標に応じて決めます。AI で扱える範囲を広げることは認めても、それを支える知識や理解まで AI に任せれば、学生本人には何も残りません。そこで、読む、考える、比較する、判断する、書く、説明するといった活動のうち、どれを本人が担うかを決め、考える負荷を授業や課題の中に意図的に残します。この負荷は一律に課すのではなく、合理的配慮や学生一人ひとりの特性に応じて調整します。事例として、講演者自身が担当する少人数授業「データサイエンス III」の反転授業を紹介しました(図 2)。学生は教科書を予習する際に AI を使ってよく、それでも分からなかった点を授業に持ち寄ります。授業では AI を使わずに内容を説明し、教員からの問いに答えます。最も考える負荷がかかるこの説明の場面を、そのまま評価の機会としています。評価は学期末の 1 回に集めず、毎回の授業に分けて行います。

3)「本人に何が残ったか」で評価する

評価の中心は、AI を使ったかどうかではなく、学生本人が担った部分です。それを最も直接確かめられるのは、AI を使えない対面での筆記試験や口頭試問です。AI 利用を前提とした課題でも、課題文や評価基準を作り直せば、本人が行った判断、根拠の確認、AI の出力の検証、説明などを評価できます。ただし、AI では代替しにくい能力を評価しようとするほど、教員の専門的な判断に頼る部分が大きくなり、評価の一貫性と公平性をどう保つかが課題になります。講演では、こうした点から、実務上は AI を使えない場で確かめる方が選びやすい場合も多いとしました。

4)教員は専門家の判断を学生に見せる

AI は、要約、言い換え、例示、質問への回答などによって、学生が説明を受ける機会を増やせます。そのため、教員が説明の量で AI と競う必要はありません。講演では、教員に一層求められるのは、AI の出力のどこを疑い、どこを採用し、どこを保留するかを専門家として判断し、その過程を学生に見せることだと指摘しました。さらに、その判断を次の問いにつなげ、学生が学び続ける理由(「なぜ学ぶのか」)と問い(「次に何を問うのか」)を設計することも、教員の役割としました。その具体例として、ゼミや卒業研究で、AI の出力を教員と学生と一緒に読み、問いを立て直す演習を紹介しました。

【資料・動画の公開】

研修会で使用した講演資料と講演動画は、クリエイティブ・コモンズ・ライセンス(CC BY)で一般公開しており、利用に許諾は不要です。資料冒頭の「前置き・おことわり」をご確認の上、学内の教員研修など、AI を前提とした教育や評価を検討する場で自由にご活用ください。使用された場合は、差し支えなければ下記までお知らせいただくと幸いです。

・講演資料(HTML)

https://www.cc.mie-u.ac.jp/~shirai/jp/doc/GenAI_FD_slide_2026_0909_pub.html

・講演資料(PDF)

https://www.cc.mie-u.ac.jp/~shirai/jp/doc/GenAI_FD_slide_2026_0909_pub.pdf

・講演動画

<https://youtu.be/9I1NZ-qIuBE>

【用語解説】

持ち帰り型レポート: 学生が授業時間外に取り組み、後日提出する形式のレポート課題。

<本件に関するお問合せ>

三重大学 情報基盤センター 白井 伸宙

E-mail: shirai@cc.mie-u.ac.jp